

## 論文の和文要旨

論文題目：タタール語における人称標識の出現傾向について—コーパスに基づいた研究—  
氏名：菱山湧人

タタール語(チュルク諸語北西語群)では、名詞句や節に人称代名詞が出現している場合、主要部に対応する人称標識が現れる場合も、現れない場合もある(例: **bez-neŋ awıl(-ibiz)** [1 複-属格 村(-1 複.所有)]「私たちの村」、**Min tatar(-mın)**. [1 単 タタール人(-1 単)]「私はタタール人だ」)。本稿は、タタール語および他の主なチュルク諸語を対象に、コーパスを用いた定量的調査を主とした調査を行い、1) タタール語における人称標識(表1)の出現傾向を明らかにすること、2) タタール語における人称標識の出現傾向を他の主なチュルク諸語と比較し、タタール語のチュルク諸語における位置づけを行うこと、を目的とした。調査結果から本稿では、主に次の二点を主張した。1) タタール語における人称標識の出現傾向は複数の要因(表2)によって異なっており、通言語的傾向に沿っているものと沿っていないものがあること、2) タタール語における人称標識の出現頻度は他の主なチュルク諸語に比べて低く、これは言語接触によるものである可能性があること。

表1：人称を標示する要素(タタール語)

|     | 人称代名詞<br>(主格形) | 人称標識    |        |      |
|-----|----------------|---------|--------|------|
|     |                | 所有人称接辞  | 述語人称標識 |      |
|     |                |         | 代名詞型   | 所有型  |
| 1SG | min            | -(E)m   | -m(En) | -m   |
| 1PL | bez            | -(E)bEz | -bEz   | -K   |
| 2SG | sin            | -(E)ŋ   | -sEŋ   | -ŋ   |
| 2PL | sez            | -(E)GEz | -sEz   | -GEz |

表2：人称標識の出現傾向とそれに影響している要因

| 人称標識   | 要因         | 出現傾向                                   |
|--------|------------|--|
| 所有人称接辞 | 人称・数       | 2SG 標識 > 1PL 標識                        |
|        | 主要部要素の種類   | 述語 > 被所有名詞 > 後置詞的名詞                    |
|        | 従属部と主要部の距離 | 非隣接 > 隣接                               |
| 述語人称標識 | 標識の種類      | 所有型 > 代名詞型                             |
|        | 主要部要素の種類   | 動詞 > 形容詞 > 名詞                          |
|        | 節の種類       | 非動詞述語文：その他 > =mE 疑問文<br>動詞述語文：主節 > 引用節 |

本論第一部では、タタール語における人称標識の出現傾向について述べた。

タタール語の人称標識の出現傾向に関する先行研究の記述は不十分である。属格人称代名詞が現れる場合の所有人称接辞の出現傾向に関しては記述されていない。述語人称標識に関する記述は、定量的調査を行った上でのものではない。よって、コーパスを用いた定量的調査を中心とした調査を行い、タタール語における人称標識の出現傾向を明らかにする必要があると筆者は考えた。

調査に際し、まず人称標識が現れうる領域を分類した(名詞句と名詞節に分け、名詞句はさらに所有名詞句と関係節名詞句に分けた)。次に、人称標示構造を統合型(人称が人称標識のみによって標示される構造、例: **awil-ibiz** [村-1 複.所有]「私たちの村」)、分析統合型(人称が人称代名詞と人称標識の両方によって標示される構造、例: **bez-neq awil-ibiz** [1 複-属格 村-1 複.所有]「私たちの村」)、分析型(人称が人称代名詞のみによって標示される構造、例: **bez-neq awil** [1 複-属格 村]「私たちの村」)に分類し、調査対象を分析統合型および分析型とした。

所有人称接辞に関する調査の結果から、主に、1) 人称・数、2) 主要部要素の種類、3) 従属部と主要部の距離、が所有人称接辞の出現頻度に影響していることを示した(所有人称接辞を義務的にする個別具体的な要因を除く)。より具体的には、1) 一人称複数標識の出現頻度が有意に最も低く、二人称単数標識の出現頻度が有意に最も高いこと、2) 後置詞句や、後置詞的に機能する補助名詞(例: **yan**「横」、**art**「後」)が主要部である名詞句で所有人称接辞の出現頻度が有意に低く、動名詞 **-(U)w** や非定形コピュラ **ikänlek** が主要部である名詞節で所有人称接辞の出現頻度が有意に高いこと、3) 従属部と主要部が隣接している場合に所有人称接辞の出現頻度が有意に低く、隣接していない場合に所有人称接辞の出現頻度が有意に高いこと、を示した。これらの調査結果から筆者は、1) 一人称複数標識の出現頻度が最も低く、二人称単数標識の出現頻度が最も高いという傾向は、人称階層(Siewierska 2004: 149) が示す通言語的な傾向(1st > 2nd > 3rd)には沿っておらず、接辞の長さ、指示対象の数といった要因が関係している可能性があること、2) 所有人称接辞の出現頻度が、後置詞句や、後置詞的に機能する補助名詞が主要部の名詞句で低く、動名詞 **-(U)w** や非定形コピュラ **ikänlek** が主要部の名詞節で高いことは、述語階層(Siewierska 2004: 127) が示す通言語的な傾向(**predicates** > **possessed nouns** > **adpositions**)に沿っていること、一方、所有人称接辞が譲渡可能名詞よりも譲渡不可能名詞で現れやすいという傾向は見られず、被所有名詞階層(Siewierska 2004: 138) が示す通言語的な傾向(**inalienable** > **alienable**)には沿っていないこと、3) 所有人称接辞の出現頻度が、従属部と主要部が隣接している場合に低く、隣接していない場合に高いのは、従属部と主要部の距離が離れるほど、それらの関係が所有人称接辞なしでは分かりにくくなるためであること、を主張した。

述語人称標識に関する調査の結果から、述語人称標識の出現傾向は主に、1) 標識の種類、2) 主要部(述語)の種類、3) 節の種類、によって異なることを示した。より具体的には、1) 所有型の標識に比べ、代名詞型の標識の出現頻度が低いこと、2) 述語人称標識の出現

頻度は、述語が非動詞述語である場合に有意に低く、動詞述語である場合に有意に高いこと、非動詞述語文では、名詞述語よりも形容詞述語（特に感情やモダリティを表わす形容詞）で有意に高いこと、動詞述語文では、動詞が意図形 *-mAKčE*、（結果状態を表わす）完了形 *-GAn* である場合に有意に低いこと、3）非動詞述語文では、疑間接語 *=mE* が現れる疑問文（以下、*=mE* 疑問文）で述語人称標識の出現頻度が特に低いこと、動詞述語文では主節に比べて引用節で述語人称標識の出現頻度が有意に低いこと、を示した。これらの調査結果から筆者は、1）所有型の標識に比べて代名詞型の標識の出現頻度が低いのは、所有型の標識の方が文法化の度合いが高いためであること、2）主要部要素の種類による述語人称標識の出現頻度は大まかに「動詞>形容詞>名詞」であるといえ、この傾向は意味論的述語階層 (Siewierska 2004: 132) が示す通言語的な傾向 (*event > property > class, locational*) に沿っていること、3）非動詞述語を持つ *=mE* 疑問文で述語人称標識の出現頻度が特に低いのは、非動詞述語文で述語人称標識が主に強調して述べる必要がある場合に用いられる（断言モダリティを表わす）ことから、疑問モダリティとは相性が悪いためであること、動詞述語文で、主節に比べて引用節で述語人称標識の出現頻度が低いのは、主節主語の視点に関係しているためであること、を主張した。

**本論第二部**では、チュルク諸語におけるタタール語の位置づけを試みた。

タタール語以外の主なチュルク諸語における人称標識の出現傾向に関する先行研究の記述も不十分である。さらにそれらの記述も、定量的調査を行った上でのものではない。よって、タタール語以外の主なチュルク諸語を対象に、コーパスを用いた定量的調査を中心とした詳細な調査を行い、それぞれの言語における人称標識の出現傾向を明らかにする必要があると筆者は考えた。

調査対象とする言語は、トルコ語（南西語群）、ウズベク語（南東語群）、カザフ語（北西語群）、チュヴァシ語（オグル語群）とし、それぞれの言語でタタール語の人称標識（表1）に対応する標識の出現傾向を調査した。

所有人称接辞に関する調査の結果から、1）タタール語における所有人称接辞の全体的な出現頻度は、トルコ語、ウズベク語、カザフ語よりは有意に低く、チュヴァシ語よりは有意に高いこと、2）トルコ語、ウズベク語、カザフ語、チュヴァシ語においても、所有人称接辞の出現頻度が人称・数によって異なり、一人称複数標識の出現頻度が有意に最も低いというタタール語と同様の傾向が見られること、3）主要部が後置詞的に機能する補助名詞である場合に所有人称接辞の出現頻度が低いというタタール語で見られる傾向が、トルコ語、ウズベク語、カザフ語では見られないこと、4）トルコ語、ウズベク語、カザフ語の関係節名詞句と名詞節では所有人称接辞がほとんどの場合現れること、を示した。先行研究の記述および調査結果から筆者は、1）多くのチュルク諸語において、一人称複数標識の出現頻度が他に比べて低く、二人称単数標識の出現頻度は高いという傾向が共通している可能性があること、2）タタール語を含めた主なチュルク諸語で一人称複数標識の出現頻度が低いのは、一人称複数という人称・数の持つ特性が影響しているためである可能性があること、3）チ

チュルク諸語の中で所有人称接辞が最も衰退しているサリグ・ヨグル語において、本来は二人称単数を表わしたであろう形式  $-(I)n$  が残存していることと、本稿で定量的調査を行った5言語（タタール語、トルコ語、ウズベク語、カザフ語、チュヴァシ語）において、二人称単数の所有人称接辞の出現頻度が高いことは、関連している可能性があること、4）一人称複数標識の出現頻度が最も低く、二人称単数標識の出現頻度が最も高いという傾向は、牧地マリ語（ウラル語族フィン・ウゴル諸語）でも見られるため、チュルク諸語に限られないこと、を主張した。

述語人称標識に関する調査の結果から、トルコ語、カザフ語の非動詞述語文（名詞述語文・形容詞述語文）でも述語人称標識が現れない例が見られるが、タタール語に比べて有意に少なく、容認度も低いことを示した。よって、タタール語の非動詞述語文（名詞述語文・形容詞述語文）における述語人称標識の出現頻度は、トルコ語、カザフ語より低いと言えることについて述べた。先行研究の記述および調査結果から筆者は、言語による述語人称標識の文法化の度合いの違いが、言語による述語人称標識の出現頻度の差と関係している可能性がある一方で、述語人称標識の文法化の度合いが同程度であっても、言語間や同一言語内で述語人称標識の出現頻度に差が見られる場合もあることについて述べた。

最後に**結論**で、タタール語における人称標識の全体的な出現頻度が Common Turkic に属する主な言語（トルコ語、ウズベク語、カザフ語、サハ語）より低いのは、ロシア語などの周辺言語との言語接触によるものである可能性を提示した。